

International Programs Newsletter No. 11, published March 5, 2010
Website: <http://international.edu.mie-u.ac.jp/index.html>

天津 滞在記

社会科教育講座 教授
手塚和男

8月20日(木)神戸に前泊し、翌21日(金)天津行きのフェリー燕京号に乗船する。折からのインフルのため、

体温検査が手続き前に行われる。乗客は学生グループなど、大勢だ。SFA209号室、3階の部屋だ。荷物を預けることをせずに乗船したが、下船の時えらい目にあった。が、食事の時一緒だった中国の方が手伝ってくれ、何とか長い階段を下りることができた。入国手続きを済ませると出口には馬曉菲老師が私の名前を書いた紙を持って待っていてくれ、「先ほど学生が、手塚先生は後から来ます」と言っていましたという。15時到着予定の船が、大分遅れて17時近くに入国したので、長いこと待たせる結果になってしまい、詫びた。とても上手な日本語を話す馬老師と師範大が手配してくださった車で師範大のホテルに到着。一休みして、ホテルで夕食。師範大での生活が始まる。授業の始まりまで、1週間ほどあるので、その間に必要なものの買い出し等をする。学級委員をしている、孫榕さんと馬婉華さんが買い物の手伝いをしてくれ、とても助かった。帰路、山東省の近くを運航中に、携帯電話が再度使えるようになったので、御礼の電話とメールを送ることができ、来春三重大でお会いできるのを楽しみに待っていると伝えることができた。

三重大事務室備え付けの図書、村上春樹『やがて哀しき外国語』(1997年、講談社文庫)を読む機会があり、「外国人が外国語で自分の気持ちを正確に伝えるコツ」が書いてありました。「(1)自分が何を言いたいのかということをもっと自分がはっきりと把握すること。そしてそのポイントを、なるべく早い機会にまず短い言葉で明確にすること。(2)自分がきちんと理解しているシンプルな言葉で語ること、難しい言葉、カッコいい言葉、思わせぶりの言葉は不必要である。(3)大事な部分はできるだけパラフレーズする(言い換える)こと。ゆっくりしゃべること、できれば簡単な比喩を入れる。以上の三点に留意すれば、それほど言葉が流暢でなくても、あなたの気持ちは相手に比較的きちんと伝えられるのではないかと思います。しかしこれはそのまま文章の書き方にもなっている。」(p. 179)

さて、大事な本務の日本語口語の授業だが、姜先生の授業に出させてもらうことで、どのように進めればいいのかのアドバイス、アイデア



を得ることができた。全くのド素人で日本語を母語とするに過ぎない私にとって、どうすればよいか。教科書を使って会話の練習、言葉の説明等々をするが、これでよいのだろうかと絶えず疑問がわいてくるし、申し訳ない思いも深くなる。

が、唯一できるのは料理を一緒に作ることだと思い、市場での買い物しながら日本語で話し、値段の交渉は学生に任せ、作る時にも一緒にするので、食の部分を通しての日本語会話を補うことができたのではないかと考えていた。が、ある学生曰く、「食事中は夢中で食べますので、日本語会話になりません」と。納得したが、後の祭り。

須曾野先生が持ってきてくださったカレーも一緒に作り、私の誕生日に学生達と一緒に祝っていただき、東先生、姜先生、林老師、張老師も参加してくださいました。また年末に山田先生が持ってきてくださった蕎麦は、皆で作った水餃子とともに、元旦の日に学生と楊先生、馬老師、林老師、宇老師、張老師、劉老師も加わって、年越し蕎麦ならぬ元旦蕎麦を楽しんだ。その折に、東先生が用意してくださったビンゴゲームはホテルレストランの従業員も加わって、興奮気味に楽しむことができた。オープンの加減で何度も失敗を重ねて、帰国前にはやっどドイツ風ナッツパンを焼くことができるようになった。

最後の学期末試験の考試では、考試分析等を書くことが大変だったが、日本語口語は幸運にも、問題、模範解答を提出するという、科挙試験以来の伝統に従うことはなかった。その点、東、姜両先生は大変だったようだ。

フェリーを使うことの罪は、時間が遅れがちなため馬老師を長時間待たせることになること、天津空港よりも天津新港は遠いため、時間がかかることではないかと思う。今後の参考になればと思います。



尊敬する手塚先生を囲んで

One Memorable Year at Mie University

Cherry blossoms were in full bloom when I first came to Japan last April. I was much honored to have been invited as a lecturer by the Faculty of Education of Mie University for one year. I have also been supervising twenty-one Chinese students from Tianjin Normal University who came along with me in a joint educational program between Tianjin Normal University and Mie University.

Teachers in Faculty of Education are very friendly and warm to all of us, which helped us adapt ourselves to the new environment very quickly. They have been taking care of each of us meticulously, and their hardworking spirit deeply impresses me and every student. We joined shuttlecock competitions together and watched students' drama performances in Japanese. We also went on trips to Kyoto and Kobe, where our great friendship was strengthened in our hearts.

During this school year, I taught "Introduction to Chinese Culture" and "Sightseeing in China". I was highly impressed by the Japanese students' interests and hardworking attitudes in my class. We made Chinese knots, cut paper in shapes, drew Chinese paintings, enjoyed Chinese movies, and made Chinese tea. We tasted Chinese culture in many interesting ways, and all

平成 21 年度教育学部特任講師 馬 静 (Ma Jing)

of us learnt and shared a lot in class. Through my lectures, I gave them tours through movies and pictures to China's historical attractions. Together, we appreciated the ancient Chinese wisdom in building the Forbidden City and the Great Wall in Beijing. We walked around the Bund in Shanghai and were amazed by the magnificence of Terracotta Army in Xi'an. We visited the lovely pandas' home in Sichuan. We rode horses together on the grand grassland in Xin-Jiang and had parties with kind and nice Tibetan people in Potala Palace. Upon the completion of my lectures, students gave presentations on their "Travel Plans of China", which were very interesting and impressive.



あっという間に、めきめき日本語が上達された馬老師

Time flies. The one-year visit will be finished soon. Here I would like to thank all my colleagues and students, teachers and friends sincerely. Without you, this year would never have been that enjoyable and colorful.

天津師範大学留学生帰国

三重大学と天師大の合作弁学プログラムに基づく第 1 期留学生 (2009 年 4 月 3 日来学) が本年 3 月 15 日に帰国します。教育学部での一年間を振り返って、一言ずつ綴ってもらいました。

李 雅

この一年間いろんな面倒を見てくださった先生方、本当にありがとうございました。



劉 妍

考えなかったことをいっぱい考えさせていただき、少し成長した気がする。視野を広げるすばらしい機会だと思った。



張 琳

あっという間に一年間でした、日本での日々はきっと人生のいい思い出になると思います。



許 婷婷

日本の生活はとても楽しかったです。日本にきてよかったと思います。



劉 爽

日本で充実な十ヶ月を過ごしました。先生方と日本人の学生さんたち、ありがとうございました。



羅 藍瓊

迷ったり落ち込んだりすることはたくさんあった。でも、来てよかったと今の自分なら胸を張っている。



合作弁学プログラム天津師範大学留学生



入学式記念撮影

三重大学長・教育学部長とともに



奉 薇

この一年間を楽しく過ごしました。とても充実な一年間です。いろいろお世話になりました。ありがとうございます。



張 凡

とても楽しく充実な一年間でした。これからも頑張り続けたいと思います。ありがとうございます。



馬 蕾

またたく間に一年が過ぎました。本当に日本に来て、三重大大学に来てよかったと思っています。



宋 曉琳

とても楽しい一年間でした。いい勉強になりました。たくさんのいい思い出ができました。



邵 月靖

日本での一年間の留学生活ですが、中国での三年間の勉強生活よりずっと充実でした。



李 金竹

三重大で留学しているうちに、さまざまなことを体験させていただき、本当にいい勉強になりました。



張 英傑

本当に多彩な留学生活です。毎日充実で楽しく過ごしました。悔いの残らない一年間です。



鐘 潔瑩

この充実した楽しい一年間は一生の貴重な思い出になります。三重大大学の方々、ありがとうございます！



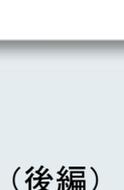
丁 叶蕾

人生の軌道を変える一年間だった。勉強の信念だけでなく生活の理念もチェンジした。豊かな勉強になった。



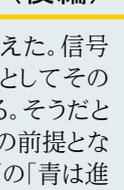
趙 浩童

一年間の留学生活を通じて、一番学んだことは、学んでいないものがまだまだ多いということです。



趙 越

楽しい留学生活でした。いつもお世話になって、心から感謝しております。日本に来てよかったなと思っています。



京都清水寺合影

楊 曼捷

あっという間に一年間を過ぎて、とても楽しかったです。いろんな友達をできて、いろいろな知識を勉強してきました。



海 秀英

楽しい一年の留学生活でした。いろいろ教えてくださった先生方たちといろいろ助けってくれた学生たち、感謝してます。



周 悦怡

日本留学に来た私は、日本の大学で、先生がたの指導のもとで、学問の厳しさに磨かれ、勉強することはただ単なる知識の獲得、また終了証の獲得だけではなく、真理を追究することであると分かるようになりました。



劉 辰楓

おかげ様で本当に楽しい一年でした。ご援助、誠にありがとうございました！



教員海外出張報告

数学教育講座教授 新田貴士
古都クレルモンフェロンで（後編）

そこでまず初めに、信号機とは一体何であろうかと考えた。信号機とは「人、車が同時に来た時に、青は進め、赤は止まれとしてその優先順位を指し示すもの」というのが、本来の意味である。そうだとすれば、厳密にその定義通りに考えるならば、確かにその前提となる、「人、車が同時に来る」という仮定が崩れた場合、以下の「青は進め、赤は止まれとする」という規則は全て無効になる。仮定が間違いであれば、結論は何でも正しいという、数学、論理学の基礎である。聡明な読者の皆様には釈迦に説法になってしまい、「しつこい奴だなあ、そんなことはわかっているよ！」とお叱りを受けてしまうが、お恐れながら説明させていただく。例えば、「1足す2が4であれば、2足す3は5である」も正しいし、「1足す2が4であれば、2足す3は6である」も正しい。「1足す2が4であれば」という前提仮定が間違っているからである。その場合には結論は正しくても間違っているけどんなもので

[前編の内容]: 仏兄とともに歩いているといつも遅れてしまう「私」。横断歩道で遅れをとるのが原因らしい。後編では、「私」の数学的頭脳が全開し、議論は日欧の比較文化論へと発展する。

あっても、文章自体はいつでも正しいことになってしまう。そのことを少し我々は妙に感じるかもしれないのだが。つまり彼らは、「仮定が間違いであれば、結論は何であっても、文章は正しいという」という論理をそのまま用いて行動していたのである。なにも、数学をする場合のみ、その論理を用いているのではなかったのである。私はというと数学をする場合はその論理で、実際の行動は、その論理を用いずに行動していた。その事実気がついた時、背筋が凍る程のゾーとする恐怖を東洋人の私は覚えたのである。

なぜならば彼らは常にその論理の下で行動しているということは、彼らが人と人の約束を履行する場合にも、またスポーツや学問研究などの様々な競争をする場合にも、また国と国との条約を履行する場合にも、常にこの論理感で行動していたということである。また現在も行動しているということである。現に今回の訪問もゆくゆくはな

にがしかの学問上また団体間の条約の締結に繋がるかもしれないのだ。今までも彼らの行動を見ていて、またスポーツや武術等の日本人との試合をテレビで観戦していても卑怯だ、ずるいと感じることがあった。またフランスやヨーロッパの歴史を人から聞いたときにも何か卑怯な、ずるいなあと感じることもあった。なぜ卑怯だ、ずるいと感じたのか、その1つ1つの状況は今思い出してみるとこの論理の真偽感の違いによることが多いことにおそまきながら気がついたのである。

我々は妙だと感じる「仮定が間違いであれば、結論は何でも正しい」という論理を彼らは全く妙だとは感じないのである。ごく自然に感じて行動しているのである。我々の場合、前提仮定がどうであれ、規則は守るのが当たり前だということがないだろうか。そこそ我々が何を卑怯と感じるかどうかの根この部分となっていないだろうか。見渡してみるとほとんどの約束やルールは、前提仮定があってから結論があるという文章からなりたっている。前提仮定が崩れれば約束やルールのその後の文章は全て無効である。何もそれは卑怯とかずるいというのではなかったのである。そして数学の論理がここまで厳密に生かされ直接的に行動にまで反映されているということは日本の文化で育った私には驚嘆すべきことであつたし、ショックであつた。

私には今まで理解出来なかった彼らの行動が、理解出来たことは非常にうれしいことであつた。しかし、更に良く考えてみると、実はそれは逆だつた。数学の論理が先にありそれに合わせて行動している



クレルモンフェロンの学生たち

のではない、そのように行動してきたというのが先で、その行動論理を数学の論理としてただ書いただけというのが正しいことに気がついたのである。数学が生まれたこのヨーロッパの国々では、もちろん行動の際の論理も数学での論理も一致していることはごく当たり前で、違っている方がおかしいのである。確かにその通りであるが、何か不思議な感じがした。そしてそのことに新たな大きなショックを再び受けてしまった。この仏兄とは、お互いの雰囲気は非常に良く似ている。おそらく元々持って生まれたものは、もっとよく似ていたのであろうと思う、しかしその後には育った文化によりお互いの行動すら危うく誤解しそうになる程にまで開いてくるのだなあということ、フランスの小さい古都でひしひしと感じたのである。

第 16 回 3 大学国際ジョイントセミナー&シンポジウム開催

第 16 回 3 大学国際ジョイントセミナー&シンポジウムが 2009 年 10 月 19 日(月)から 22 日(木)にかけて本学三翠ホールにおいて開催されました。アジアを中心とした 7 か国 19 大学から 90 名の参加者が集まり、「人口」、「食料」、「エネルギー」、「環境」、「コミュニケーション」という 5 つの主要テーマの下に、それぞれの研究成果を英語で発表しました。プログラムには関宿やシャープ亀山工場見学なども組み込まれ、外国からの参加者は、古い伝統的な日本と最先端テクノロジーの日本という、日本の二つの側面に触れる機会を持ちました。

三重大学からは 13 名の学生が発表しました。うち 1 名は教育学研究科の院生(森雅也さん[英語教育専修 1 年])で、「To Develop Communication Skills in Classroom」というタイトルで研究発表を行いました。また、家政教育講座の乗本秀樹先生には、「Convenience and Identity of Our Daily Lives」という題目で「人口」の分野における基調講演をしていただきました。



パワーポイントを使っての研究発表風景



今年度実施のポスターセッション

UNCW 留学生帰国

大学間協定校の UNCW (University of North Carolina at Wilmington) から初めて迎えた交換留学生が 1 年間の勉学を終えて帰国します。三重大学での経験を日本語で書いてもらいました。

三重大学での経験

UNCW 留学生 Trevor Paxton

4 月 1 日エイプリルフールは、アメリカで冗談を言ったりする日ですが、去年の出来事は、全く冗談ではありませんでした。なぜなら、あの日に私の日本での生活が始まったのですから。私は、アメリカの大学で国際経営を学んでいるので、日本に来た目的は、日本語が話せるようになることでした。日本に来てすぐは誰も知っている人がほとんどいなくて、不安に感じるものがたくさんありました。けれど、先生や他の留学生との交流の機会が増えていって、日本での生活も少しずつなれていきました。国際交流センターでの授業は、読み書きや会話などたくさん学ぶことができ、とても良かったです。また、三重大学の日本人学生とのチューターでは、日本語の勉強を手伝ってくれたり、学生と日本語で話す機会がたくさんありました。

後二ヶ月で一年が経ち、三重大学で日本語を勉強したりたくさんいい思い出を作ったりした時間が終わります。ふりかえってみると、自分に関するさまざまなことが良い方向へと変わっていったのが分かりました。日本での経験を将来のやくに立てたいです。



(左) 来学時のトレバー君
(右) とロバート君



トレバー・パクストン君